

地域文化協同と子どもたち

—「ぞうれっしゃがやってきた」コンサートの 取り組みに関わる聞き取り調査より—

鈴木 庸 裕 (生活指導論)

1. はじめに

子どもたちを地域における文化活動の主体へと育てていくために、大人（父母・教師）がいかなる関与をおこなうべきか。こうした課題は従来、地域文化活動の重要な柱であっただけでなく、近年では地域文化協同の課題となって新たな動向を打ち出している。その中で、全国各地で取り組まれている「ぞうれっしゃがやってきた」コンサートは子育て協同・地域教育文化運動の、とりわけ地域文化創造の表現文化と地域主体形成を問う新たな手がかりとなってあらわれている。

本報告では、地域の文化が人と人をつなぎ、またその文化を人々が育てていく過程において、子どもと大人、父母ともどもの生活圏を豊かにしていくという課題に対し、大阪府寝屋川市で1991年3月に取り組まれた「愛と平和のコンサート・ぞうれっしゃがやってきた」の聞き取り調査の記録をもとに分析検討をおこなってみた。ここでは、とくに聞き取り調査の記録をできるだけ再現することによって、これまで概括的な紹介にとどまっていたこの活動を資料的価値のあるものとして聞き取り記録〈資料〉にまとめ、そしてこの実践が父母・大人、教師の文化的関与という地域の文化協同の取り組みで果たす位置を明らかにしようとした。現段階ではこうした記録は貴重であると思われる。

この「聞き取り調査」は、寝屋川教育問題調査（後に発展した大阪教育文化センターによる子ども・教育問題総合調査）の1つのプロジェクトとして、1991年3月に座談会形式で実施したものであり、大阪音楽大学の犬前哲彦氏らとともに企画

および準備をおこなった。なお、この調査より得られた聞き取り記録〈資料〉については、紙面の関係上ならびに読み易さを考え、小見出しをつけ、文意を損ねることなく若干の修正を加えた。その文責はすべて筆者にある（出席者の所属は当時のものである。）

2. 地域文化活動における「ぞうれっしゃがやってきた」の位置

(1) 「ぞうれっしゃがやってきた」とは

合唱組曲「ぞうれっしゃがやってきた」が1986年3月に名古屋市教育センターで初演されて10年近くなる。その間、数十人から1千人をこえる人数規模で年間多い年で120回以上といわれる公演が全国各地で、教育や子育て関係者、父母、青年、子どもの手によってなされてきている。これは、小出隆司氏原作の絵本『ぞうれっしゃがやってきた』（岩崎書店、1983年）をもとに、清水則雄氏の作詞、藤村記一郎氏（愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団）の作曲によって生まれた合唱構成である。この作品をベースにして地域の親子合唱団はもとより、学童保育や子ども会、学級・学校、施設での文化行事活動にも取り入れられ、あるいは「うたごえ」「合唱」という表現文化活動を越えて、平和や地域の学習、親子活動を含めさまざまな地域・教育・文化の「拠点」ともいえる活動にまで成長している。

この「ぞうれっしゃ」のあらすじは下記の通りである¹⁾。また、合唱の構成は「サーカスのうた」「ぞうを売らないで」「雪よふるな」「動物園へようこそ」「動物を殺せ」「悲しみの日」「いくさの終

わる日まで」「本物のぞうが見たい」「ぞうをかしてください」「ぞうれっしゃはしれ」「平和とぞうと子どもたち」(1988年9月改作を含む)となっている。寝屋川の活動では、合唱組曲のコンサートのみならず、合唱のソロ部分の劇化や空襲、こども議会の場面を再現するなど構成劇やアクションを挿入している。

あらすじ

サーカスから東山動物園にやってきた4頭のぞう、アドン、エルド、マカニー、キーコは子どもたちの人気者。でも戦争が激しくなり、各地の動物園では動物たちがつぎつぎと殺されていきました。そんな中で名古屋の東山動物園では、北王園長さんを先頭にぞうたちを必死で守りぬいたのです。そして、戦争が終わったあと、生きのびた2頭のぞう、マカニーとエルドを見たいという子どもたちの夢を乗せた特別仕立ての「ぞうれっしゃ」が全国各地から名古屋へと向かって走ったのです。

(2) 史実に関する若干の補足 — 「こども議会」

80年代中盤以降、享受としての文化から創造・再生としての文化という志向が急速に広がっていく背景には、地球環境問題や平和・戦争問題という類的な生活課題に多くの人々が関心を寄せはじめた点にある。こうした志向はこれまでの身の回りの文化さえをもみずからの生き方とからませて改変していく表現活動として表出してきた。とくにこの「ぞうれっしゃがやってきた」がひろがる要因について、原作者の小出氏は今日の社会における平和と民主主義に対する危機感や史実のもつすばらしさ、合唱組曲の作品としてのすばらしさ、親子が一緒になっておこなうことのすばらしさ、つくりあげる過程における担い手の主体形成などを挙げている²⁾。そのうち、以下に述べる聞き取り記録にはあらわれてこない点、とりわけ史実に絞っていうと、2頭の象を守った動物園園長などの様子の他に「本物のぞうが見たい」と東京から名古屋まで千数百人の子どもを乗せた象列車を運行させた東京都の「こども議会」の存在がある。この「こども議会」と子どもたちの行動について当時の新聞報道をもとに掘むと次のようになる。つまり、東京こども議会は1959年5月6日に「子どもたちに議会政治のあり方をわかしてもらおう」という目的で東京都と都教育委員会が開催した「マメ議員」100名の議会である。(朝日新聞、

同年5月7日付)。「上野の古賀動物園長が何度も足を運んでもまだ目鼻がつかぬ東山動物園の象さんにたまりかねた東京都台東区子ども議会では上野中学一年大畑敏雄君、第二師範付属中学原田尚子さんの二人を代表として名古屋市に送り塚本市長にお願いしたあと五日の名市(名古屋市 — 筆者)こども議会に出席、こどもはこども同士でと東京の子たちのゆめにまでみる象を見たい気持ちを訴える。なお名鉄局(名古屋鉄道局 — 筆者)では東京のこどものために特別列車を走らせ東山動物園で心ゆくまで象の曲芸などを見せる話が進められている」(中日新聞、1959年5月8日付)。

その後、象を名古屋から東京まで移送することが困難であったり(この件については名古屋のこども議会の二人の生徒が東京へ「お詫び」に行っている。なお、このとき参議院厚生委員会は東京の子どもから出されていた象輸入請願書を満場一致で採択している)(朝日新聞、同年5月15日付)、逆に東京からも学校を休むことや旅費の問題からひとまず中止になるが(朝日新聞、同年6月4日付)、名古屋市教育委員会からの東京都への要請などもあり、6月26日、東京から1,050人の児童生徒を乗せた「象見学列車」が名古屋駅に到着している(朝日新聞、同年6月27日付)。なお、その後上野動物園では子どもたちからの請願要求によりインドから象の輸入を実現している。

この「ぞうれっしゃがやってきた」は、こうした戦後子ども・教育史のやや隠れた一面としての史実をもとに、現代の子どもたちに自信と勇気のメッセージをおくっていると考えられる。

3. 地域文化協同の取り組み — 聞き取りの記録

このコンサート終了から1ヵ月後、寝屋川市内で主な実行委員に集まっていたおこなった聞き取りの記録が以下の〈資料〉である。なお、公演までのほぼ1年間におよぶ取り組みについては、実行委員会や事務局会議、情宣活動、構成メンバーとその動きなどをもとに本報告末の〈表〉にまとめておいた。

〈資料〉

取り組み直後の感想から

— 鈴木(司会)

この「ぞうれっしゃ」の取り組みが大きな成功をおさめました。一つの文化的な企画が成功するには、いろんな条件がいます。この地域の条件、とりくむ人々の熱意、それから企画の内容など複雑に絡み合っていると思います。そういうものをみなさん方から出していただくために集まっていたきこの会合を催すことになりました。自己紹介をかねてお願いします。

— 学童の指導員をしている板倉です。

私は、学童保育連絡協議会からこういう取り組みがあるんだけど取り組む学童はありませんかと声をかけていただいて、「ぜひやりたい」と私ともう一人の指導員との二人の思いではじめさせてもらいました。父母の会にもやりたいのだけとお話させてもらったら、「まあ、そんなに先生が言ってくれるのだったら」という感じで、父母の会の方と一緒にはじめました。最初、私らがひっぱっていききましたが、最終的には子どもらがひっぱって、私らもひっぱられて親もひっぱられて、すごくいいコンサートやったなあと思います。

— 池の里小学校の教師をしています関野です。

私は実行委員会の事務局を担当していました。全国的な「ぞうれっしゃ」の盛り上がりから、寝屋川でもやろうということではじめたんです。いま、どうしてこの「ぞうれっしゃ」がこんなに広がったのかを、ずっと寝屋川でやってきた人たちの話や自分の体験してきたことから考えてる最中なんです。

— 寝屋川の子ども問題連絡会の前畑です。

寝屋川には22の学童がありますが、その内9学童、半分弱が参加していました。これはやっぱりすごいと思うんです。全部来たらそれこそ800名。やっぱり子どもを音楽など文化活動に引っ張ってこれる力が学童保育にはあると思いましたね。やってる親も指導の先生も、そんなこと思っていないかもしれませんが、逆に言うと学童じゃない子どもたちをここまで集めるというのは大変な事なわけです。それだけ家族や子どもたちがバラバラになってると思いましたね。

— 学童保育の父母の内海といます。

この合唱に関わったのは、さっき板倉さんがい

われた学童保育連絡協議会の呼びかけがあったからです。私の場合、父母の役員会でこれをどうするか話合ったんです。僕はもともと歌が好きなので、「よし、やったろか」という気で役員会にかけたんです。はじめ賛成は得られませんでした。「そんなしんどいこと内海さんやめてくれ」「そうでなくても僕はしんどい」という意見が大半を占めたんです。けれど、意義を訴えると「まあ、内海さんがそんなに言うのだったらいっぺん先生に頼んでみる」といいはじめてくれました。役員会としては、好きな子だけが参加するのではなく、学童の子どもたち全員で取り組む形で先生にお願いしてみようということに結果としてはなりました。先生に持ち込みまして、先生、うち4人いますけど、ただ歌の好きな先生はいなかったのですがOK になりました。はじめ、親の方が組織できなかったんです。ところが、いよいよ終盤になると、夜、練習に集まるようになり、「指導の先生にはお願いできないから、親が子どもを連れてもっとしっかり関わらんと出来ないな」と急遽役員を集めて細かい計画を立てました。夜、連れて行ったんですけども、夜連れて行く中で子ども自身の感じ方が変わってきたと思います。僕も夜、参加させてもらったけど、これはすごいなあと受け取りました。

本番になったころには、親も見に来ましたからね。終わった後は、子どもたちが学童保育の中で、遊びの中で、歌を歌うとかそれなりにすごい印象を残したんだと思いました。

— 生活協同組合から出てます、松下といます。

はじめ、生協の地区の中で「ぞうれっしゃ」があるということで私が出ました。最初は生協の中でも「練習に来るのなんかゼロに近いよ」とみんな無駄な事だなという感じがありました。でも、いろいろ組合員さんや地域の方に呼びかけて、たまたま、チケット制になって呼びかけてましたら来てくれた人が10人くらいいたんですね。その中で、歌のテープを流したらそのテープですごく感動された方たちが「ああ、いいなあ」と参加して来られました。また、生協のお母さん方でそれを聞きまして、「子どもと晩行くの大変やけどね、子どもと一緒に歌うのはすごくいいわ」と、特に市職会館で合同レッスンになってからは、みんなものすごく熱が入ってきました。これは今までの「サ

マーフェスティバル」みたいに、一時的に出て歌ったらいいと取ってた人も、「これは一生懸命やらないと他の団体と一緒にやるんだから真剣にとりくまないかん」とすごく熱心になり、出られない人もテープを家で聞いて練習するようになりました。コンサートが終わってから、よくお母さん方に会ったら言われるんです。「こんにちは、このあいだはどうもお世話になりました」と。何かなと思ったら「ぞうれっしゃのいい思い出をつくっていただきまして。いまだに3歳の子どもが歌っています。親子ともどもいい思い出をつくっていただきまして一生残ると思います」と言われてとても感動したんです。こちらも素晴らしかったよなあといまだに生協で打ち上げた時も、楽しく歌って「ぞうれっしゃ、ぞうれっしゃ」と言っているんですよ。この魅力は何かと今考えてるところなんです。

— 同じく、生活協同組合の堀と申します。

松下さんがほとんど言われたのですが、個人的には、最初、事務局会議に出た時はクーラーもなくものすごく暑いところで、人も来なくて、本当にどうなるのかと思いました。私は、今まで6~7年生協組織部で他団体との連携のところに関わってきたのですが「これは大変になるなあ」と言っていたんです。でも、練習がはじまって子どもの歌声に私自身が励まされました。すごく明るいし、元気がいい。そこに励まされながらひばられてやってきました。最初は私も歌は上手でないし音符も読めずとにかく人集めのために、枯れ木の山をにぎわすような感じで参加していました。ところが、だんだんやり進むうちに何か目に見えるかたちで力が結集してくるのが実感でき、例えばチケットの売れ具合とかだんだん高まっていくなど、長い間、生協と他団体との仕事をしてきましたがこんなに感動したことはありません。

それともう一点。生協は町づくりということで一生懸命やっておりますが、ある配役で生協の職員が3人参加してくれたんです。彼らも最初は本当に恰好だけすればいいのかと言っていましたがかん熱の入った厳しい指導だったみたいです。厳しいというよりは自分たちで考えないかんという働きかけがあったようで、一時かなり落ち込んだりもしていましたがそうも言っとられんということで関わって行ってくれました。それを見て私た

ちも励まされて、取り組んでこれ生協の中ではかなり評価されています。いま、「ぞうれっしゃ」がこの寝屋川で、なぜこんなに沢山の人たちをあつめ成功し本当に充実感があって感動したのか、私たちがの方が知りたいくらいです。

— 寝屋川市学童保育連絡協議会事務局の名村です。

感想というと、僕自身、予想外の人が集ってもらったことです。子どもの人数も200人程度は予想してましたが、それ以上の300何名で、前日はどうして舞台上げようかと心配したほどです。

僕は歌がもともと好きなんです。けれどもちの子どもは嫌いなんです。学校の成績も音楽はぜんぜんダメ。何を歌わせても同じ節なんです。「歌いに行くか」といったら「歌？嫌いだ」「お父さんも行くから行こうや」「お父さんが行くならまあ行ってもいいわ」としぼしぼきいてくれました。その子が学童でも練習はしていたようです。夜の練習に初めて来て、僕は練習を聞いて参加して「これはちょっと違うなあ」と。この雰囲気はこの子にも教えたいと思って、帰って「来週行こうな」と言ったら「いや」なんです。でもその次の日もやっぱり連れてこないかんなんて思って、お菓子かなんかで釣って連れていったんです。ところが連れていったらみごとに変わりました。家に帰ってから「お父さん、なんでもっと早く僕をあそこに連れてってくれなかったん」とこう言うわけです。

「お前、何言うてんねん。いやや言うてたやろう」というと、「そういう時はこづかいくれへんでもかませんし、おやつくれへんでもかまへんから連れてってくれたらよかってん」とこう言うのです。うちの子どもは練習に幾度か参加して何かを感じたのだと思います。そのあとは必死に歌ってますわ。本番の時に、自分の学校のクラスの先生が見に来てくれたんです。その時担任の先生は「何で歌の嫌いなあの子が舞台上で真剣に、大きな口を開けて歌っているの」とびっくりして見てました。だから、この「ぞうれっしゃ」の歌だけには、あの子は本当に虜になってました。今でもテープきいて、一人で歌ってますね。不思議ですね。

「ぞうれっしゃ」の魅力

— 鈴木

お聞きしていると、他の歌（作品）だったらこ

うはいかなかったんじゃないかなという面があるような気がします。この「ぞうれっしゃ」の人々を惹きつける、その胸に突き刺さるそういった魅力についてお聞きしたいのですが。

— 関野

まず、主人公は動物でしょ。また、子どもたちは学校で「かわいそうな象」とかを学んできているので身近に感じているということがあると思います。それに加えて、メロディーや言葉なんかも一回歌ったら忘れられないような、そんなメロディーが多く、覚えやすいというか、惹きつけられるのだと思います。大人は大人で、「園長さん」の場面とか日常生活にあふれている音楽ではない、なんか別世界のような音楽で、こんな音楽あったのかと思わせたからです。それと子どもと一緒に歌えるというところで、大人たちも子どもを新鮮な目で見れるというふうを受けとられることがあったんじゃないかと思います。もちろん、この「ぞうれっしゃ」は実話に沿った内容ですし、戦争の時に毒殺されようとしていた動物を園長さんが「私たちを殺してからにしてくれ」と言って守った話、そして上野動物園の話は死んでしまってお墓になってますけども、名古屋（東山動物園）の象は生き残って子どもたちを喜ばせた話。それだけでもすごく明るくて感動的だという面と、中身そのものにも惹きつけられたと思います。

— 堀

どん底の時に希望を見い出してまた希望をつなぐっていうところにすごく感動したんです。

取り組みへの願い

— 鈴木

「ぞうれっしゃ」の作品そのものの分析については、多くの人々がつくりあげてきた文化を腑分けするという大変難しい作業が必要だと思いますが、この取り組みへの願い、例えば実行委員会のみなさんのテーマとは何だったでしょうか。

— 内海

僕、この話聞いた時に市民会館という大きな舞台の上で、本当にそのお客さんの前でひとつ歌うという経験はおそらく一生の内、そう何回ももてる経験じゃないと思ってたんです。親だから、子どもにいつんでもそういう経験をさせてあげたいなという思いがありました。それにこの平和

とか愛という問題は、学童では1～6年までいますが、簡単に歌を歌うだけで分かるような問題ではないと思います。この歌を歌って舞台上に立ったら一つの経験として残るから。大人になった時、「あっ、あの時ああいう歌うたったの、こういうことだったんだな」とたぶん分かってくれる時がくるだろう。そういう気持ちをずっと持って全部の子どもを舞台上に立たすということを最初から考えてきました。僕は指導員じゃなくて親だから歌に取り組む時にどんな指導をすればいいのかわかりませんが、例えば絵本なんかも持って来ていろいろと丁寧にやればやるほど子どもたちが大人になった時になるほど思い出す機会は増えるわけで、そういうのが僕としてはありました。

ゆうこちゃんのがんばり

— 板倉

もともと、歌というのを今まで学童の活動の中では日常的に位置づいていなかったんです。他の学童には、「今月の歌」というようにしている所もあります。うちはそういうのをやなくて「やりたいやりたい」という思いはありましたがなかなか手が出なくて「みんなで歌ったらどんなに楽しいやろう」というところが乗り出す一つのきっかけにあったんです。やっぱり最初は、子どもらになかなか伝わりませんでした。10月くらいからはじめたのですが、その時に内海さんも言われたように絵本を読んだり戦争のお話をしたりとか、私の相棒の先生が昔、音楽の先生をしてた先生で、市民会館の舞台上で歌ってる子どもの写真とか持ってきて子どもたちに見せたり、わりと前段階に結構時間をかけました。子どもらにやる気があるのかないのか。その辺は指導員と子どもとのかけ引きみたいな所もありました。こっちのペースで進めていって子どもが本当にのってくるかどうかもう一つ手ごたえがなかった時期、10、11月くらいまではそうだったんです。でも、12月にうちは「ぞうれっしゃ」のオペレッタを学童の子どもたちだけでやり、それもおもしろい台本にして取り組んで、そこでやりはじめた歌を2、3曲覚えたところからすごく手ごたえが出て来て、実際にあったお話が歌になっている所は子どもたちにとって魅力だったみたいです。歌自身がなんか学校で習う歌ではないみたいだけど、ちょっと大人が歌うよう

な難しい歌なんです。子どもにしたらそれがすごく楽しくて歌いたくなってオペラを歌ってる気持ちで歌ってるんです。ちょっとレベルが高いんですけど、それを歌うのが気持ちいいというようになってきたら、逆に子ども達が自分たちでテープかけて練習しました。「オペラブラザーズ」という名前をつけられた子どもたちもいましたが、いつでもどこでも歌いたくなくなってしまいました。それから、1年生の子が3年生4年生のお兄ちゃん、お姉ちゃんたちに「手つなごう」と言うんです。手をつなぎながら手を振りながら歌うんです。それがすごく楽しくて、歌の練習がしんどいなという時期を乗り越えて、自分たちのものにしていきました。この辺からパワーがすごくあふれてきたなあと思います。

その頃はまだお母さんたちの中にももう一つ理解のないこともあって、学童のオペレッタを多くのお母さんたちにも見てもらいました。その時に一週間くらい前に「親の都合で休ませます」というお母さんがおられたんです。2年生の女の子でわりとおとなしくて、学童の中では中心になっている子ではないのですが、「休ませます」と言われて「ゆうこちゃん、どうして休むの」、「お母さんが用事あるからあかんって言うねん」と私と話す時はもう目に涙をためて「ゆうこは出たいのに」という気持ちをあらわしていました。結局私がお母さんを説得して、介護の必要なおじいちゃんをなんとか都合つけるようにしてもらいました。でもお母さんは見に来てくれなかったんです。学校の体育館でもオペレッタが終わってみんな気持ち良かったんですね。その時にゆうこちゃんが、お母さんに対してははっきりと「私は出たいから、お母さん連れてってくれ」と訴えたんです。もともと日曜日に子どもを連れていくようなお母さんではなかったのですが、ゆうこちゃんがすごく頑張ってくれて、結局夜の練習にお母さんが車で送ってくるようになり、それから「自分の車、出すよ」とよその子も乗せて来てくれるようになったんです。それは、ゆうこちゃんの力だと思うんですが、コンサートの時も都合つけて見に来てくれました。お母さんはとても感動したみたいで、もともと感想文などをマメに書いてくれるようなお母さんじゃなかったんですが、すぐ感想文を持ってきてくれて「すごく感動しました」と書いてありま

した。その後で、懇談会の時にゆうこちゃんのお母さんが「ゆうこが最近、私に対しても批判するようになったし、すごく変わってきた」、「ごまかせなくなった、小さい時みたいに」と言われました。お母さんに「この子も頑張ってる」という姿を見てもらえたことがよかったです。

子どもたちの感想文から

— 鈴木

ここでコンサート後に書いた子どもたちの作文をもとに話を進めたいと思います。小学生のいくつかの感想を読み取りますと、多くの子が来年もまたこういう機会があったら歌いたいという気持ちを表現しています。その中で橋本まゆみちゃんは「学童の先生が後ろを向いたらいけないのに、後ろを向いてました。その時、学校のクラスの先生が笑ってた」と書いています。普通、学校ではこういう関係は難しいと思います。それに対して後ろにいたかなちゃんが「前向きや」と言ったとあります。

また、初めて本番のああい舞台に立ったという印象は大変大きいっていう事が言えます。それに、特に、「歌ってて涙が出そうになってきたっていうのを我慢してた」という子。大人の歌うパートの部分聞いてて、涙が出てきた。歌と一緒に大人の顔を見てるんですね。子どもは舞台に立ちながら、お母さんいてるかなと探して、お母さんと目が合ったかな、恥ずかしそうにして歌っているんです。この辺、おもしろいなと思います。

ただ単に歌うだけじゃなく、その中にいろんな、「構成劇」と言うか、一輪車が出てきたり、ピエロが出てきたり、それは内容的なことだと思いますが、そういったものへの子ども達の感動が多くて語られています。それに、これは「昨日」と作文に書いてあるから、次の日に書いた作文だと思えますが、昨日だけのことを振り返るのではなくて、昨日まで頑張ってきた、本当に練習がきつかったと言いつつも続けてきたというその練習の過程から書いてきた子どももいるわけです。前日の感想だけでなく、積み上げてきたものを自分のものとして自覚し、そういった所を強調して書いた子もいました。また、「間違えた、どーしよう」というのも子どもの感想に残ったようです。しかし、「間違ってもいいや、回りの子もみんな間違っ

てる」というこういう子ども大変多いんですね。中には「横の子に間違えたの聞かれて恥ずかしいな」という子どももいるんですけど、結構子どもたちは、この中で生き生きしてるといふか、子どもどうしの関わりの中での世界といふか、例えば小学校の3年生の男の子ですが、「あいとへいわのコンサートにあってよかった。はじめは練習の時、あまり行きたくないと思ってたけども、歌を歌ってて、せんそうは本当に大変なことなんだ」と書いています。ちょうど、イラク戦争などの湾岸危機のことなどもあり子どもの中に写ったのだと思います。

子どもに励まされて

— 松下

関野先生が「子どもたちを信用して」といわれ、それを聞いて感動したんです。やっぱり大人の人間が一生懸命前で歌うと、子どもは真剣にならざるを得ないといふか大人の姿を見たら感じるものがあるんですね。だから、ふざけていたらいかんということをしつづ胸の中に留めていってどんどん舞台に近くなると真剣になっていき、子どもの中に「一生懸命歌わない」という気持ちでいっぱいになったのだと思います。最後の舞台できちんと出来るというようにと。それまでに大人の姿がなければ、また、ちょっと違ったものになってくると思います。真剣に歌うという点では、大人であろうと子どもであろうと関係ないという感じで、子どもも歌えるようになったと思うんですね。

— 堀

生協会館で練習してた時に高学年の子ははにかんで恥ずかしがって歌わないんです。男の子なんか特に歌わなくて、「元気がないよー」と言ってもやっぱり歌わなかったんです。でも大きいお兄ちゃんたちが「よし、歌うよ」と声をかけると、みんな一斉に歌い出したんですね。今の子っていうのは、縦がなくて横のつながりばっかりでしょう。それが、ああいう所でつながるんだなあって思いました。他の団体とやっていく中で子どもが一生懸命やる姿を見ていく中で、一生懸命取り組まなくてはいけないなあというような感じに私たちもなったし、職員も「これはちょっと、一生懸命やらないといけないですね」という感じで、仕事をなんとか都合つけて、ここで歌うという感じでね。だから、子どもを見て、子どもがやってるから一

生懸命歌わなきゃいけない。感想の中で「子どもたちに励まされました」と言ってたんですよ。「子どもってすごいんですね」って。大人が結構いいかげんで、とにかくお付き合いみたいに出とけばいいだろうという感じだったのが子どもを見て「一生懸命やらんといかん」と。だから、大人も勉強させられる、子どももまた、お母さんが歌ってるから、また、お兄ちゃんたちが歌っているのだからという中で一生懸命やらんといかんというふうにごく盛り上がってきたんじゃないかなと私も思います。

人が気になる経験

— 板倉

学童でも普段から集団を育てるといふのは、学童保育の目標でずっとやっています。やはり1、2年生の子は集中が続かなくて、その辺は3、4年生が支えてくれたなあと思います。練習の時でもかえって4年生の男の子が、2年生の子がそこで遊んでるのに気になって自分が歌えないんですよ。それを何回も何回も注意してるのですが、なかなかその子らがちゃんとしなかったから、その子に「作文に書いて」と言ったら、そのことばかり書いてるんです。異年齢の中での支え合いがはっきり見えたと思います。

— 鈴木

人が気になる経験といふのは、大変大切なことだろうと思いますね。

子どもが子どもに働きかけて

— 内海

それからもう一つ、話に聞いたんですけどね。洋平君が言うにはその近所の子はだれ一人参加してないんですけども、その中で「洋平君、あんた出るねんてなあ」と言うのと「出るねん」「そしたら見にいっくわ」と。このお母さんは興味がないみたいで連れて行ってくれそうもなかったのですが、でも「お母さんに頼んで見に来て」といふと、合間は塾とかでは見に行くことはありませんでしたがお隣のお友達が「ぞうれっしゃ」に参加するっていうことで、「見に行きたいからお母さん連れてって」と、友達と「ぞうれっしゃ」といふ一つのことをやっていく広がり子どもたちの中で話し合って実現した子どもたちもいます。

— 板倉

とくに学童保育の中で、普段わりと外遊びが多いのですが、こういう活動になってくると、そういう場面で目立たない子がすごく目立って、そういう子の存在がすごくみんなの中で浮いてきて、それがみんながまた楽しくて、またみんなの中に降りてくるっていうようなことがありましたね。走るの遅いけど歌は好き。かわいらしく乗って歌ってるみたいなのがありました。

子どもの出番の発見 — 子どもへの信頼

— 鈴木

いつもと違うその子の出番があったということです。大切なことだと思います。その出番をこちらからだけで盛り立てるんじゃなく、その子なりに「あ、今オレは頑張ってるんだ」というような自分に言い聞かせてる子どももいます。自分自身に「かつひろ、頑張れ。その調子や」と声をかけたという子どもの作文がありました。

— 板倉

私ね、子どもの本番の集中力というのは確かにすばらしかったと思います。やっぱりやる時にはやるっていう子どもは賢いと言ったら変ですが、普段遊んでいてもやる時にはやるんだという姿を見せつけられたと感じています。そういうのも指導員の中では9校参加してて、合同練習とかあると「どこの子がうさかった」とか(笑い)「この子は一番行儀よかった」とかね、すごい言い合いみたいになるのですが、そのときは本当に指導員は肩身が狭いんです。かつひろ君と言う子ががりハースルの時、よくふざけてたんです。隣の子とたたき合いしてたんです。私すごく腹が立って真剣に「帰れなさい」と言ってね。(笑い)そしたら「帰れへん」と言い出して、「それやったら頑張り」と落ちついたんです。その中では何というか、子どもはどこで頑張ったらいいいのかを分かっているのだなと思いました。手を抜いていい時とだめな時と、こっちがキイキイ言っているわりにちゃんと心得ているのだなと思いました。その中では私も、子どもを信じるっていうのは出来なかった部分でもあって、それは反省するところです。ある2年生の子はなかなか集中力がなくて、一枚の宿題のプリントするにも1時間もかかる子で、ものすごく大変なんです。しかしこの子も本番は

すごく集中してたなあと思います。先ほどの作文も何回も書き直しているんです。なかなかうまく書けず結局3回くらい書き直してこれを書いていました。

— 松下

この象をつくる時に子どもたちが体育館でばあーっと集まってきて、そのとき絵の具の色がいろいろあったんです。そしたら「おぼちゃん。灰色はー？」と言うんですね。そしたら北条先生が「そういう色は今日はないの」と言われたんです。「自分の好きな色の象を今日は書いていいよ」って言わはったんですね。「ええ!?象ってあれやのに。それやったらこれでもいいの?やったあ!」と言ったんです。それで、ピンクとか赤の象とかが出てきて「私、ピンクや」「私、青や」と、服なんかばあっと脱いで、そこにポーンとほって書いていました。そしたら先生が「そんなところに脱いだら汚れるよ」と言いながら服をたたんだんです。そしたら一人の子が「そんなことしとったら、あかんやんか。自分らで片づけな」と言ったんですね。そしたら先生が「こぼすのだったらたたんであげたら良かったね」と言うのと「ああ、そうか」と案外子どもは一言文句を言う所があっても、こういう雰囲気の中だから子どもも素直になれるのだなあと思ったりもしました。あと、絵を書きながら私に言うんですが、「おぼちゃん、あの子ね、腹立つねんて。私がせっかくここまでピンクで書いたのに違う色に塗り替えやってん」、「なあ、じゃあ私たちはこっちにしよう」とまたグループが出来て違う色でつくりはじめていました。それぞれに子どもってこういう広い所で好きなように書いていいのっていうと、伸び伸びするんだなというのがありました。その中でも一人みんなの輪の中に入っていけない子がいて、私のところにずっといました。「じゃ、これで遊ぼうか」と言うたら「うん」といって「次、何するの?何するの?」とうながして「じゃあ、これ塗ったら?」と言ったら「うん」といいながらその中で笑みが出てきて「この子一緒にいれてあげて」と言ったらすつとみんなの輪の中に入っていました。やっぱりこういった広い場所で描くのは子どもにとってもいいものだと思います。私が子育てしていた頃は「もう近頃の子は!」という思いがありました。でも今も小さい子ばかりに私の目がいくんです

ね。かわいいなと思って。小学校の子がやってくるのを見て、何を見てもかわいいなと本当に怒ることがなくなりました。私が「ぞうれっしゃ」に参加して勉強させられ考えさせられたのはこのことです。こういったところにお母さんたちが入って来ると自分の子どもの良さがよく見えて魅力がありました。町づくりなどという場合も、やっぱりこういう雰囲気の中で出ていくんじゃないかなと感じています。これが生協の活動から考えるとこれまで見ていなかったことや失いかけていたものを発見させてくれたと考えています。

学童保育の成長

—堀

今まで私は寝屋川という地域で、それぞれの所で頑張っていて、学校の先生は学校の先生、生協は生協でそれぞれ活動をしているのが、今回はいい意味で結集したなあ。結びついてあのようなことが出来たんだなあと思います。生協で言えば、生協は当初から平和運動にずっと関わって来ているのでこのテーマには乗れるのですが、夜に出かけていくというのはなかなか普通の組合員やとくにお母さんには大変です。愛と平和のコンサートは特別なことをやるんじゃなく、日常的なことの中の一部として出来たっていうのがありましたわ。今までずっといろんな母親大会とかサマーフェスティバルの音楽版みたいな感じですよ。そういうことがあって、こういうことが寝屋川で400名の参加が出来たと私自身は分析しています。

—内海

僕はこれに関わってきたのは、事務局で最初僕も出れなくて、役員会で会長がこういう取り組みがあり、寝屋川学童保育連絡協議会の20周年の一環として、今年はこれをやっていこうということでだれか出てくれないかという話になり、結局、僕しかいなかったんです。「何をしに行くんや」「なんか歌をうたうらしい」「まあ、ええやろ」ということで出たのが発端で、事務局に入ってもらわないと困るというので、「それもまあ、いいでしょう」と、夏前まではそんなに考えていなかったんです。ところが、実際にこれに取り組み出して、大体の結団式が台風で流れて、その後僕自身も「その後どうなるのかな」と不安がありました。その不安がもろに第一回目の練習に出てきたんです。第一

回目の練習は総合センターと生協会館でやったんですけども、惨憺たるものでした。20~30人くらいかな。子もパラパラ。こりゃなんとかもう一回集めないかんぞ。僕は国松の学童に行って「こういうのやるから、先生やってな」と言ったら、即座に言われたのが「あれ難しいから、なかなか出来へん」(笑い)「ええ!そんなに難しいんか」と父母の中でもこれを知っている人がいて、その人も「これ知ってる。けど難しいわ」と。蓋開けたらなかなかみんな集まってくれないし、「こりゃちょっと難しいのと違うか」と。学童の方はこちらからなんとか20周年の取り組みやからやってくれと声をかけました。「とりあえず歌の指導に来てくれるならやってみようか」という学童がちらほら出てきて、結局9団体になったんです。僕は国松へ2回くらい、ちょっと早めに子どもを迎えに行き、ちょうど歌の練習してるの見てたらまあとにかくひどいんですわ(笑い)。先生一生懸命やってくれてるのにもかかわらず、知らん顔して横向いてる。覚えてるのは覚えてるけど「早よ、終わらへんかな」っていう子どもの感じ。何人かは一生懸命歌っているんだけど。「大丈夫かなあ」と思っていました。そういうのを一年中毎日やるじゃないし、それでも9学童取り組んでもらえて、その内15~16人づつ子どもが参加してくれると、150~250になんとかなるだろうと。僕はもうそのことしか考えてなかったです。当初、事務局長に言われた学童の子ども150人。大人はまあ子どもが150人来れば50人くらいなんとかなると甘く考えてたら、大人は0に等しい状態。あげくの果てに僕が出て行かないとしようがない状況に。役員会で男の人がいないから出てくれと他のお父さんを説得して、わずかに面目を保ちました。僕は国松学童で指導員に言ったのは、「とにかく出たいという子を集めてくれ。むりやり出しても無理やし」と。とにかく低学年については一応、親にも相談して、結局それで33人集まりました。そのとき、子どもの側に参加したいという子が大多数でした。うちのせがれなんかも「出たくない」の一本やりで、僕は練習に来るし、ちょうど水曜日の練習で空手に行って空手の帰りに7時半頃、この近くを通るから「お前直接、こっちに来い」と。案の定もう、めいっばい国松が悪いっていうそういうのも関係ない(笑い)。誰か一人つれがくるとか。

「とにかく静かに聞いといて」(笑い)「もう行かなくていいか?」「いや、行かなあかん」と。僕も、とにかく市民会館の大きな舞台で何かをするゆうことはまず、ないからいい経験やから来い、と。お父さんも行くから。で、とにかくあれだけの人数の前でやった。よかった。そしたら今度は何の不満が出てきたかと思ったら「ビデオにオレがちょっとしか写ってへん」(笑い)で、かなり良い写真撮ってくれたのですが、ところが彼はごついんですけども小粒なんですわ。目の前に大きな人がいて写ってない(笑い)。子どもたちはやっぱり出たいんですよ。特に観客が多くいて、その中で出たというのは、かなり大きな自信になっている。あの舞台に立ってあの人の前で「ぞうれっしゃ」が歌えたこと、これだけのことが出てきたと思っています。それをやっぱりもう一つ、何かの形に発展させたいですね。幸いにして一つ、出来たのだから。

— 名村

僕自身、とにかく事務局としてなんとか引っ付いてきましたので、「最終的にチケットが何枚しか売れてへん、なんとか入るやろか」。当初これしか頭にありませんでした。チケットの売れた枚数のいいところ7割しか入らない。それを聞いていたものだから「チケット1,000枚しか売れてない、700人来ればええとこや。700人言うたら、400何名舞台の中じゃ、観客どうなるんだらう。これはもう会計苦しくなるんちゃうかな」と。ところが当日、蓋を聞いてみると、まだ立ち見がでている。当初は2階へ上がったらダメだからとっていたのですが、いつのまにか2階もいっぱいになっていました。

そのことで、2、3聞いた話では、学童の指導員の力は大きいと思うんですよ。やっぱり親がね、都合で邪魔くさいからやめとけ、もう、行かんでええと言うのはかなりいましたが、その中で、指導員と子どもとの話の中で子どもが行きたい、指導員も「子どもが行きたがってるので、何とか行かせてやって下さい」。それで、かなり子どもが集まって来た。その子どもがこういう所に出ることになると、親も「邪魔くさいけど、行かなしょうがない」という親がかなり増えてきてもう前日くらいに「当日行ってもチケット売ってもらえますやろか」とも言われました。今度の取り組みの中

で、学童の指導員の力と、子どもは何かやりたいという気持ちはいつももってると思いましたね。だから、そういう力を与えてやって、こういう取り組みではかなり大きい力になってる。ところが、いかんせん、大人がもう少しなんとか出来たらなと。その辺がちょっと反省点です。

— 関野

大人も子どもも一緒だと思うんですけどね、最初は自信がなくて「見に来てくれ」とは私も子どもにも言わない。そんな感じであったのが、やってくるうちにだんだんと自信がついていく。そうしたら、さっきの洋平君じゃないけど「出るねんで、見に来てや」「あんた、出るねんでねー」というような感じで、「じゃあ行くわ」と共鳴しはじめる。やっぱり自信が付いてきたら、みんなに見てほしい、認めてほしいっていうのがあって、そういう中から広がっていったんじゃないかなと改めて感じています。私なんかでも、大人にしてもこんないのが出来てきたのは、間際になってきたら、「こんなのがあるよ」と訴えやすくなってきたこともあり、みんなで取り組んで来た力がだんだん立派なものになってきた時には、みんなに訴え、見てほしいという気持ちがあって広がっていったんじゃないかなと思うんです。

子どもの成長を認める眼

— 鈴木

歌を歌うことをただ目的としてしまわないで手段としてとらえてきたと思います。事務局長が言われたように、中にも帰りにお母さんとこういう話をしたとか、友達と平和のことを語り合ったり、「今日は良かったね」という親子の話し合いが出来たという感想を最後につけている人も結構いるんです。取り組みを見ていくときにプロセスを大切にするんです。その過程が結果を生み出すという発想をするんです。「ぞうれっしゃ」の実践の中で、絵画制作がありました。こうしたことをやっている取り組みは他のところには見られないんですね。僕はこれが寝屋川で成功した決定的な要因だと考えています。絵画製作という共同製作をする中で「自由な色、使っていいよ」、「じっとしている象じゃなくて、生き生き動いている象を書きなさい」と指導されています。子どもたちは学校ではそういうような仕方で絵なんて書いたことない。

象というのはこういうもの、ほんとの象のあの色しかイメージできないような世界に子どもたちはいます。それがぱっと「そうじゃないんだよ」とそれを崩されることによって生まれる自由さ、つまりぼーんと服をほおって素直に共同製作に関わる子どもたちの姿は解放された空間を得たという感じがします。

それともう一点は、話をずっと聞いて「強いリーダー」がいなかったということがいえるのではないのでしょうか。「強い」という中身とは、子どもたちを動かすという意味で子どもたちを指図して動かすそういう強さです。「はい、次、これやれ。はい、次、…。」とどんどん子どもを押し流して行くような、そういう強さがみられません。逆に言うとな関野先生が言われてるように子どもを信頼し、子どもに積み重ねられてくる力に依拠して進められている。先程学童の板倉さんが言われたように、はじめは「こうせなあかん」とがながん子どもに言ってたけども「これではいかん」という自分の中でも変化が一つありました。学童そのものも最近では学校化されてきているといわれます。学校の下請け機関になりつつあるということです。それを私たちがくい止める中で生活してる子どもが今回の「ぞうれっしゃ」をつくりあげてきてということが一つ言えます。

それと、こういう活動が日常化していることです。どなたかも日常ということと言われたと思うんですけども、今回のこの取り組みが日常だったのかどうかということなんです。本当に自分たちの生活の中から出て来たものなのかということですね。やっているといつのまにか、一緒になってしまいますけども、みんなでやって、作られてきたものとしての日常なのか、簡単に言うと、自分の生活にとってつけたような意味での日常なのか、本当の自分たちの生活だったのか、ということですね。歌声運動っていうのは、そういうどちらかということ、支配されてた文化に対抗する意味で自分たちで自前の文化を作りあげていこう、そう言ったものが、「ぞうれっしゃ」の中に流れてくる歌の意味合いだと思うんですね。そこに流れてくるのが平和であったり愛であったりします。特に名村さんが言われたように今回の取り組みは予想外であったと。予想外と思っていた名村さん自身の問題というんですが、なぜ予想外と自分で思っ

いたのかという自分自身の問題はどうかだったのか、それはみなさん、それぞれにお伺いしたいんです。今回の取り組みを通じて自分がどう変わったのか。相手に訴えようとする時に自分がそこに入って、自分がまず変わっていくっていうプロセスが一つあると思います。自分の親子関係だったり、職場の関係であったり、また、学校というもののとらえ方でもあったり、例えば、何か自分の中で変わった、あるいは今まで意識してなかったことが、今回の取り組みで出来たとか、そういう自分にとっての発見事項みたいなの絞り出していただけたらと思います。

— 前畑

大人もそうだと思うんですけど、子どもたちにとって今まで、いろいろ生きて来た中で、「我を忘れる経験」が非常に少ないんじゃないかなと思います。例えば子どもが大人を見て、子どもに言われて大人が真剣に我を忘れて何かをするという経験です。ところが今回の取り組みは、いろいろと話が出ましたが、いざっていうと真剣になってるんです。大人も子どもも。舞台の上に立つことだけではなくて、本当に真剣に身体を動かして声を出す経験です。それが子ども自身に強くも残っていると思います。頭では戦争がどうのこうのっていても根底では我を忘れる経験をした。僕自身にしてもあんなに真剣に歌ったのは初めてですし、指揮者に怒られながら歌いましたけどね。そういうのがあったんじゃないかという気がしますけどね、それは、学校で教えていただく歌とかテレビとかで歌ってる歌じゃなくて、やっぱり歌そのものの中のドラマ性というか、戦争のこの事実が入ってるからよけいに共鳴したと思います。

— 板倉

私は最初はすごく不安だったんです。この子らがやりきるだろうかという不安です。最初にも言ったけど、始めはわりとこっちの思いの方が先行してたと思うんですね。大人がかなり引っ張ってたなって所があって、学童では、「だからそういうことも大事なんだ」というふうに思ったと言うか、子ども自身の姿を、子どもから出てくる自身の姿、うちらでは日ごろの遊びも、わりと子どもが遊んでいる遊びを「子どもの中から出てくる遊びをみんなに広げよう」と。だから、わりと指導員から、これを与えるっていうようにするんじゃないく

て、指導員が与えても、子どもから出て来たようにしていくと言ったら変だけど、子どもの自主性を高めていくという風に進めていこうと指導員は考えました。この場合はもう、私らが引っ張って、引っ張ってという思いがありました。が次第にそれが子どもに伝わって、逆に子どもの方がもっとやりたいと。今回に関してはこっちで子どもたちを「やる気ないんやったら、やめとき」みたいなことを言ったこともありました。しかし、それを子どもたちも乗り越えてきたあたりからは、子どもたちに私たちの思いを意図的に伝えることの大事さを感じました。だから、あの時、私らが尻込みしていたら出来なかったと強く思います。

学校と地域のつながり

— 鈴木

指導員の方からのメッセージの内容と方法の大切さが指摘されたと思います。先程僕が言った意味は、リンカーンが「人民の人民による…」というのがありますが、民主主義っていうのは今、一番抜けてるのが「～による」ところが抜けてるんじゃないか。これまでも大人主導の活動では本当に子どもによる活動はあるのかと疑問に思っていました。「子どものため」とか、あるいは「子どものもの」という考えはあると思いますが、これもまた一つの観念として考えられている場合が多いのではないのでしょうか。学校教育での特別活動でも行事中心になってしまふ。子どもの手によって子どもが取り組みを我がものにする。その時にはじめて子どもが生き生きしてくる。

— 松下

生協ではね、日々の暮らしについての取り組みを真剣にやってるんです。はたから見たら、ほんまかなと思うかもしれへんけど。ほんとに、あの、真面目に。その中でも、そういうものが今まで育まれて来た。確かに存在してたなあとは思んですけども、今、すごく住みにくくなってるでしょう。管理社会、学歴社会の価値観をどういう所に求めるかっていうところが狂ってるって思ってるんです。そういう所で本当に暮らしを守るとか、そういう真の価値観とかね、そういうのを一生懸命、真剣になって考えてるっていうのも、おかしいけど、生協の組合員とかやってるからこういう所に頑張って働いて、よれよれになって疲れき

って、汗かいて出て来てはるんです。私らも、夜までそんな出て行かれへんわって思っても、先生の姿を見ながら励まされたんです。こういう人達が頑張ってるというのが、私は希望っていうか、「ぞうれっしゃ」の中の希望みたいなね、命というものの。そういう文化であれ、命であれそういうやさしい心であり、愛でありね、そういうものの火を絶やさずに頑張っている学童の人たちがいるっていう証明だったなあと思いました。

— 堀

以前、関野先生がとにかくお昼休みに歌を歌わない人には宿題を出すっていうのをやっていて、その時に父母の人たちは、「5年、6年となったらすぐ中学を控えてるのだからどうするんだ」と。宿題も出さなかったら、「一部の先生は宿題をいっぱい出して差が出るのじゃないか」という議論があったそうです。その時私もやっぱり不安はあって「本当や、本当や」という感じで、むこうの先生のように宿題を出してほしいという気持ちがありました。でも、その時うちの子どもが歌のコンクールに出たんです。「うちのクラスは出しますから」と先生がずっと練習させてたんです。宿題なしで。すごく不満はあったんですが、うちの子がたまたまピアノの担当でもともと無口な子だったんですが、それからなんか生き生きしたというか、その先生にひっぱり出してもらったおかげというか、ほとんど喋らなかった子が、喋るようになって、自信を持ったんです。それでやっぱり、そういうことからして、私もその頃から「ああ、やっぱり宿題、宿題ってそればかりでもちょっと考えを改めないといかん」と思うようになりました。この「ぞうれっしゃ」で、その北条先生がお絵書きした時に「何の絵でもいいんだよ」と言った時に、子どもがすごく喜んでる様子を見て感動したんです。「自分の好きな絵」といわれた時に、私がもうちょっと早くこういう所に参加していたらどうだったのかなとすごくくやしい思いをしました。だから、この「ぞうれっしゃ」に参加して私はすごく今ではほんとに、毎回練習に来る度に、子どもたちもいろいろ見てね、好き勝手してる子もいろいろいるんですけども、でも、それがだめだっていう見方はなくなっていました。うちの子に対して、これまでとにかく「これはダメ」と考えてしまう枠組みの中に入っていました。な

んかちょっと考えさせられるっていうか、だめっていう“だ”が出る前に「ちょっと待てよ」と考えるようになりました。自分の子どもにもわっと怒鳴りたくなる、「何考えてんの！」と言う前にちょっと聞く耳を持ってきたっていうか、すごくこれで勉強させられましたし、私自身が変わったなって思うんです。だから、今すごく学校の先生が子どもと関わっていいですね。私も学校の先生でも何でもないですけども、小さい子とか、子どもに関わりたいと思います。エネルギーを吸収出来るというか、自分が頑張るぞって、ぞくぞくしてくるような感じっていうか。(笑い)よかったです。

— 鈴木

子どもに対してやさしくなれるってことは、本当に素晴らしいと思うんです。

— 関野

この子は「何考えてんの」と、とにかく1つの枠組みの中で動いてる子じゃないと「あの子はもう、何考えてるの?」という考えがちょっとあったんです。でも、今は子どもでも大人でもとにかく、いや、いろんな考えがあるし、子どもでも今までなら「何してるんだろう?」とことでも、「あの子はどういうことで、こういうことしてるんだろう?」と考えていけるというか、とにかく子どもがものすごくかわいって言うか、いとおしいって言うか。

— 松下

なんかね、プラスのことをしても、マイナスのことをしても、いつも受け入れられるって言うか、「ああ、この子はこんななんだ」と。

— 堀

とてもこれで受け入れられると言うか、引っ込みじあんだった子が、私を捕まえて、ずっとしてきたから、あの子がすごくいとおしかったです。

(笑い) だから、小さい子どもたちがすごくかわいくて、で、今学校の先生っていいなあと思うんですけども。

— 関野

あまりにもね、学校の先生っていうのはね、ここまでやらせなきゃいけないっていうのがありますよ。

地域づくりと文化活動

— 鈴木

具体的に学校に噛み付いていくのは、今言われたような管理力主義がよく使われる言葉ですけども、それに対抗していく一つの考え方なり、構えなりから、具体的な方法なりが出て行くと思うんですよね。で、市民運動と言うんですか、この学童、ようは教育文化運動、くくっちゃっていいと思うんですけども、の中で今、言われたような発想っていうか、何か一致団結、連帯するのに考えを一にしてから、行動するんじゃなくて、行動する中で共同や連帯、共感していくって言うんですか、そういうものを作っていくっていうのかな、要はかつては考え方が一緒でなければ一緒に動かんっていう労働戦線があったと思うんですけど、今の一つ、一つの市民運動の中でこれだけ発展していている、市民運動の成熟というような言い方をされるんですが、それはいろんな思いを持った人がどこかで共通点を持って、力を出し合って凝縮し合うというか。だから、みんなにそれぞれ、世界なり、自分なりの文化なりを持ってるんですよ。子どもも講堂に集めて一色端に歌うたえと言ったら、生き生きしないのと同じように、子どももそれぞれ自分なりの世界なりを持ちよっていく、今回も舞台に乗って、押し合いして落ちて泣いたとか、いろいろといます。歌だけのことは感想に書かないんですね。「あの子は後ろから倒れてきて、私は前で膝打った」とか、一生懸命書いてる子もかなりいるんですね。そういうふうな自分の見方っていうものを残しながら、人と関わってるっていうかな、それはもう、私らも子どもと同じなんだなということを、作文を読んできて感じたわけなんです。だから、子どもはよく分かっているって言うか、そこにこそ、依拠したいなって言うか、子どもを取り巻く全ての人がこうと言うふうなことを感じるというか、だから、そういったものの、今回の「ぞうれっしゃ」の成功というものの鍵じゃないかな。先程の、次の課題っていうこともあると思うんですよ。これが成功して、次はこれを越える歌でなくてもいいんです。次、どういう風に子どもたちの希望をつないでいくのか。

— 前畑

寝屋川の中の地域運動っていうのはね、子どもに関わる地域運動っていうのは、基盤にあったと

思うし、その中に貫かれているのは今おっしゃった所なんです。それぞれの団体がそれぞれの団体の活動分野があって、その持ち合わせがあって、その埋め合いがあって、それが一つにならなかったら、運動にならない。そんな事がお互いに持ち味を生かしながら、お互いの良さを認め合いながら、なおかつ、自分たちのやりたいことを出し合った上で、お互い理解できあう範囲でね、しているという事を続けてきたんですね。10年もね。それがやっぱり一つ、人と人とのつながりをね、作り上げて来たという。音楽というのはいわば、人と人とのつながり、ある側面から言えば人と人とのつながりがあるから、寝屋川にも文化があるんだ、そういう言い方をみなさんなさってますね。それともう一つはね、自分たちの願いを出し合っていて、それが実現するっていう夢が、まだ大きく実現してはいないですよ。まだ、微々たるものですけど、その願いが一つでも二つでも実現することは大人にしては、関わって来た人にしては、主人公になったという、そういう見方も出来ますしね。大人も子どももそういう意味では、まるで一緒だなと、自分の番番があって、自分が力を出して、人とのつながりも広がって自信が付いて、もっとやっていこうかな、しんどいけどやろうかなっていう気持ちが生まれてくるっていうね、そんな事が日頃話を聞いてて結びついて来るなって思いました。人から与えられた押し付けのものならだめだと思うんですけどね。

— 関野

主體的にね、やっていかなきゃいけないし、寝屋川もなかなか捨てたもんじゃないなって感じがありますね。

地域と向き直す

— 鈴木

今回の話し合いの冒頭でどなたも「この寝屋川で出来たっていうが不思議だ」という言い方をされました。今、関野先生は「捨てたもんじゃない」といわれました。でもこの言葉が出てくるというのは大変心強いと思います。今回の「ぞうれっしゃ」を見て、寝屋川の市民としての自覚や寝屋川での位置づけについてどう評価されているのかお聞きしたいと思います。

— 名村

この「ぞうれっしゃ」をやってきた取り組みの中で、本当に今回の1月の末くらいに9分9厘、観客を舞台に上げて、私らは下がった方がいいのではないかものすごい悲観してたんです。それが、合同練習くらいから、特に子どもが変わっていったんです。とにかく、当日も立ち見ができるという成功に終わって、もう自分自身何をやったから、どうやったのがよかったのか、はっきり何も分からない状態で、何がどうなって成功したのかな。分からないんです。だから、はっきり言って思ってたように失敗だったらね、何でかなといういろいろ考えただろうけど、あまりにもうま酒を飲み過ぎて、後はトローンとしてるというか。だからね、このつながりがこのまま切れるのは寂しいなど、それだけです。

— 内海

僕、おもしろいなあとと思うんですけどね。例えば今回でしょ、それからいままでにあすなろフェスティバルでしょ、そして文化フェスティバルと。音楽協会もあって、これからチャリティーコンサートもあります。ポップとすごいのがあるですよ。ところが、上からじっと寝屋川市民を見てみると、正直言って、例えば、枚方のように人形劇のサークルが20も30もあるわけではないし、人形劇がいくつあるかという市民団体でいうと2つくらいでしょう。そういうところでは実際はしんどいだろうねど、何か大きい事がパツパツと起きるんですね。というのは、起こしてるのは例えば労働組合とか、生協の方とか、文化運動でやってるんじゃないんですね。それぞれ自分の領域で一生懸命やってる人が、何かの行事にパツとやっている、だから本当に文化に対するそういう領域が「やっぱりあるんだなあ」と思います。力を入れてぐっと出来る。こういう所なのかなあって気がしますね。

地域でつなぐ子どもと大人

— 名村

僕は、今度のこれに関わって、今言ったように思いが伝わってなかったというわけじゃないけども、子どもたちがこれだけ来てくれたって事は、子ども自身も何かをやりたいという思いがあるんじゃないか。だから、それを子どもに勝手にやれではなく、「こういう事がやれるんや」と親や大人

が提起してあげると、これだけの子どもが集まるんですね。ところが、今は如何せん。親が余裕が無過ぎると思います。時間的余裕も無いようだしいろんな意味で忙しい時代だから、そんなに子どもに関わってられないという状況があります。それがやっぱり夜の練習に子どもを連れて、わざわざ出てくるのは「忙しい、いやや。おまえもちょっとやめとけ。」と。ところが、「子どもだけでも他の親が連れて行こうやないか」となると親も1日くらいは時間をさいて、せっかく子どもが出るのだから見に行こうかと変わっていきます。やっぱりまず、子どもにはこういう機会をどんどん与えてやりたいと思います。いかにして親にこれだけの余裕を持ってもらうか。だから、何人かは子どもを連れて、この歌はいいから、やりたいからということに参加してくれた親子も、ずっと当初から練習に参加してくれた人もおるんですね。「子どもたちも何かをやりない」というのが今度の成功の一つと思う。そういう機会を与えてやれば、子どもも300何人パツと集まるし、そこへ親も、今回の場合は最終的には逆転して、親もしょうがないからついて行こうかと観客の動員があった。だから、それが最初からどつと来ればね、誰がおんぶをする事なしに一声だけで集まる。かなり、強烈な学童の子らへのアタックはあったらしいが僕らが行くと、知らん間にどんどんすすんでいる。そういう人と人とのつなぐ人も必要だと痛感しました。

— 鈴木

最後に関野先生の方から、今まで言われたものに関して、子どもが今後地域で何をやりたがっているのか、今回の活動を通してどう見られているかについて質問をして終わりたいと思います。

— 関野

子どもみんなにとって充実感があるというのは、一人一人が、たとえばはじめは大人にひっぱられたものであるにせよ、だんだん主体的になってきて、自分の感動を自分のものにし、そして最後、舞台の上で歌えたっていうのは、苦労しながら自

分が自分の力で自己実現できたっていうかね、そういう満足感というか、充実感が一人一人あって、成功と言えると思います。その自己実現の充実感というのが、今の自分の思いをまた違う人に、伝えて行けるという、そういう秘めた充実感ですごく明るい希望がある。私もこれをやりながら、みんなの心の中に火が灯るっていう、そんな感覚になるんですね。歌ってた人、聞いてくれた人、みんなの中に「ああ火が灯っているな」というような気持ちがあるんです。だから、次にしようということは、そういう灯った火をまた次につなげて行くっていうか、人にその火をまた分けて行くっていうか、具体的に何っていうのかはまだ分からないけれど、なんかそういう物を大切にしたい取り組みをしたいな、そしてしていかないといけないな。

— 鈴木

その言葉の次に、本当にこれからが忙しくなるんだろうと思うんですけど、今回いろんなお話を一緒に聞いていて大変有意義な子どもに対する暖かい目っていうのが伝わって来ました。ちょっと残った問題として、リーダーの問題があります。子どものリーダーもそうですし、「はじめはいやだいやだ」と言っていたピエロ役の方のように、普通のお父さんの方もリーダーになっていくっていうプロセスっていうのはどうなのかです。そして強力なリーダーの存在も欠かすことはできませんが、少し話題になりましたが人と人をつなぐ、それも無理矢理ひっぱってくるのではなくいわば「さりげなく」相手の気持ちを引き出しながら、こうした本当の文化へ身体や心を拓かせていくことの出来るような働きかけの出来る人をどう育てていくのか。これは今後、地域文化活動を考えていく際に目を向けてみたい課題です。今日のお話は、まだまだ一部だけを伝えていただいたと思いますが、みなさんの方でも何か整理でもしていただけたら、幸いに思っています。

本当に今日は、大切なお時間をさいいただきましてありがとうございました。どうも、ご苦勞様でした。

4. 地域を編集する教師像

(1) 人間関係が実感できる体験

次に、このコンサート開催の実行委員のなかで

教師の立場から中心的な役割を担った小学校の関野氏からの単独の聞き取りを中心に、地域の人々をつなぐコーディネーターとしての力量、主に筆者の言葉でいう「地域を編集する能力」³⁾の基礎に

あたる部分を探ってみたい。

この実践には学童保育の指導員（市教育委員会所管）はもとより幾人かの教師が参加し、学校での授業や行事を通じて準備が進められてきた。音楽や美術の教師が学校とはやや異質な力量を発揮している。

まず、この活動の成功について関野氏は「一緒に歌っている大人を見て子どもたちが安心して声を出す。その姿に大人も一生懸命になる」という相互作用に着目している。

「子どもってすごく大人を見てるし、大人も子どもを見ながら、見られてる、ってことを感じながら、お互いにすごく成長することを体験しました。つまり、選曲というのは重要なポイントですが、そういう親子で歌って、しかも、親子で共感し合えるものがあれば、子どもはのびのびと安心して声を出して伸びるということです。子どもがキョロキョロするのは、いつもの事なんですけども、学校ならば先生が見張っているから動かせないから、キョロキョロしません。子どもはキョロキョロしながら一生懸命聞いてるんです。そして、大人にとっても、お母さんたちの子どもをみる目が何とも優しくいいんです。親に見られている、支えられている中で、子どもの同世代の少年期なりのつながりが出来るのだと思います。」

そのなかで子どもたちにどういったちからを育てようと考えているのかについては次のように述べている。「友達であれ、大人であれ、そういう人を信じられるっていう心を育てたいと思っています。一緒に歌うことは、人の声が聞こえるわけで、他の人の声を聞いて自分の声を合わことになって、人の声が聞こえてくることは、自分も一緒にそこまで声をださないといけない。声が聞こえてこない不安になるんです。今、卒業式の歌を学校で練習しています。惹起の曲で最初の一小節の離れたところを声を出してピアノ伴奏に入るんです。ところがその声を出さないんです。子どもは他の声を聞きながら自分も声をどう出そうか、どれくらいの声を出そうかとそういう感覚で歌っているんです。そうすると逆に声が聞こえてくると、

こたえなくちゃいけない。そういう相互作用の中で、心のつながりというか、心強さというか、そういう気持ちが湧いてくるんです。まわりの声がいっぱい聞こえてきて、自分も一緒になって歌ってるから、心強いんです。」

では子どもたちの様子を見ると、「ある子が指揮者の人に『うまいね』と言われたんです。ちょうどその後、その子の学校で劇があったんですが、そのうまいねと言われたことにすごい自信がついて、その劇で主人公をやりソロも歌いました。その自信がまた、『ぞうれっしゃ』の練習に持って帰ってきて子どもたちの中にその自信を持った声で返してくれました。このことでまたまわりの子どもたちがそれにひっぱられいい声を出すようになりました。子どもは、声を聞きながら自分の声を出しながら育つんだなあ。そんな中で安心感や信頼感を言葉じゃなく身体で覚えていくのだと思います。」

(2) 子どもと表現文化をつなぐ

コンサートの舞台づくりに際して、練習日の時間をとってぞうの絵づくりがおこなわれた。「子どもたちに象の絵を下書きさせました。その下絵を北条先生がいくつかピックアップして子どもたちに色をつけていきました。その下絵を選ぶ時にどういう観点で選ぶのか聞いたら、『一番象らしくない象』とおっしゃいました。ああなるほどなあと思いました。それはもう子どもが象になってる絵というか人間的な絵なんです。子どもの書く象は人間みたいなんです。象らしくない象という。そういう感じの絵を選んで貼りました」と。ここでは子どもたちが自分の中で、意識として今までボンヤリ歌ってきたものが、絵に書いて自分の頭の中でイメージし意識化することによって歌っていてもその声ははっきりするのだと考えられる。

また、学校での子どもと比べて「だいたい学校でやるとどうしても子どもの声を一つにしようとする傾向があるんです。ところが学校外に出ますと、子どもも私も教師じゃなくなるから『こういうふうにしなさい』とは言いません。だから、子どもは自由に声をだすんですけど、だんだんいろ

んな響きがあるんです。」「学校では自由じゃないんですよ。声出すときは。先生に『はい、こうしなさい』と言われたら、どの子もその声をださないといけない。でも、こっちは違うからね。学校外だから。それだけ学校は管理社会になってるんですね。学校にいてだけで子どもは枠の中に入らないといけないし、無理した声じゃなかなかいいものが出ない。」

(3) 教師の見通し

今回の活動にあたっての見通しについて関野氏は「自分が感動したことを人々に伝えることができると思ったからやりはじめた」といいつつ次のように述べた。「歌とか、歌の中身と自分を結びつけるっっちゃうか、作業を通してイメージづくりっていうんですよ。自分のものとして子どもに身につけさせたいと思いました。」

しかも、「新しい音楽文化を創造していきたい。だから、どんどん私たちの願いや要求が変わっていくから、その先端に行く歌を歌っていかないと、子どもたちの願いも、お母さんたちの願いも歌えないんです。」歌声運動に20年近く参加してきた関野氏にとっていわばライフワークとして以上のように位置づけている。

最後に、関野氏は「校長以下、教職員の集団がどう子どもをみるのかとか、そしてどういう子どもに育てるのかという点で一致できるからできるんです」とつけ加えた。

5. まとめにかえて——地域づくりの編集

最後に、今回の活動記録をもとに、今後地域に生きる教師（教育者）の力量形成に関する課題を示しておきたい。

地域の文化をつなぐ人と人との共同について、重要な視点はその文化をある共同の活動（例えば額をつきあわせて論議する、ともに汗をかくといったものまでを含めて）に組み立てつつ、少なからず価値的方向性を指し示す人、また、新たに他の人々にメッセージを発信できる人の養成である。そのキーパーソンとなるとりわけ教師の養成

論をつくっていくには、1つの専門家であるという「専門性」のもつ「他者への傲慢さ」（寺尾修司）の払拭が前提となる。

こうした働きを「地域づくりの編集」という表現した場合、これは地域のさまざまな活動をつなぎ合わせそこに意味づけをおこなっていく作業だと言える。映像にとって編集とはあるシーンとあるシーンをつないでいくことであるが、単に情報の時間的歴史的経過やある現実の空間的想像的広がりを示すだけでない。つなぎあわせる異質なシーンとシーンのつなぎ目にある隠れた部分を想定し、映像を見る側に創造性を喚起するものである。したがって、地域づくりの編集とは、異質な事柄や人、テーマ・課題のつなぎ目に隠れている新たな発見を見通し、つなぐことの意味をつねに主題としながら1つのストーリーを完成させる働きとなる。

その場合、教師の地域活動において、重要なことは、まず、地域にいかなる要求や必要があるのかを調査分析し、その分析方法においても、地域の問題点を一般化された方略ではなく、その土地の文化の歴史的到達点ないし転換点に位置した人々の持っていた課題を文飾化して考える視点が不可欠となる。つまり、地域における教育・子育て協同がいかにかその地域（人々の生活圏）で公共的な意義をもつのかを、現実の学校教育活動のあり方の関係の中で顕在化させていくことであると言える。

〔注〕

- 1) 『藤村記一郎 合唱構成 ぞうれっしゃがやってきた』全音楽譜出版社、1991年
- 2) 小出隆司「合唱組曲『ぞうれっしゃがやってきた』とともに三年間『歴史地理教育』446号、歴史教育者協議会、1989年9月、p.56-p.57。
- 3) 寝屋川市には1994年5月現在、31の学童保育（内23が教育委員会所管）に1,238名の児童が在籍している（全国学童保育連絡協議会『学童保育の実態調査のまとめ』1994年10月より）。
- 4) 拙稿「地域に拓く学校文化」『教科外活動を創

表 「ぞうれっしゃがやってきたコンサート」の取り組み経過

1990年	4.1 北河内うたごえサークル協議会総会で決定 寝市教組に訴え		
6.1	呼びかけ人会議 (3名参加) ・呼びかけ文の確認 (6.16婦人団体へ依頼) ・レッスン体制がとれるのか指導者等 (6.19生協理事會へ依頼) ・全曲できるのか	演出家OK 市職労OK 学保協	
6.22	呼びかけ人会議 ・オルク状況 ・呼びかけ文書 300部市内各団体個人へ		
7.13	第1回実行委員会 参加—学保協、市職労、北河内うたごえサークル協議会、 わらべ亭、婦人団体、個人 ・ビデオ ・体制づくり スケジュール 合唱団組織目標		
8.22	事務局会議	市教委後援 戦争展で訴え 生協寝屋川支部で訴え 学保指重員の先生へ	
8.30	第2回実行委員会 (16名参加) ・当日全体企画 ・練習体制の確認 ・結団式の企画 (9.19王子動物園亀井一成氏を呼んで) ・企画費の割り出し ・演出テーブル体制 ・宣伝体制 ・レッスン予定表の確認 2会場毎週水曜日7~9時 特別レッスン3回		
9.14	事務局会議 学童の指導員の特別レッスン		
9.16	サマーフェスティバル出演 どしゃぶりの雨のなか50名近くが 参加訴え 大型紙芝居		
9.19	結団式台風のため流れる 実行委員長決まる (わらべ亭北条氏)		
9.26	レッスン開始 (54名参加) —ぞうれっしゃパンフ発行		
9.28	第3回実行委員会 (8名参加) 出演してもらうサークル団体 太鼓サークル「響」、アコーディオンクラブ、音楽協会 若駒に決定 ・10月より学童で練習開始 ・チケット組織2,000枚目標	第1回演出会議	
10.12	事務局会議		
10.14	寝屋川健康まつり (約30名参加)		
10.24	合同レッスン (大人30、子ども49名)		
10.26	第4回実行委員会 (7名参加) ・参加学童9所に決まる ・チケット組織目標 3,000枚配布 2,000枚目標		
			・ピラ配布体制確認 ・賛助金、出資金について 楽譜100冊売 日本うたごえ祭典合同レッスン (7名参加) 11.11 事務局会議 全市ピラ4万枚配布 11.23 海外派兵反対市民集会で歌とアピール 11.30 第5回安行委員会 (台風のため延期) *池の里小「ぞうれっしゃよはしれ」音楽集会で 12.2 がんばれあすなろ文化フェスティバル出演 (65名参加) 市役所本庁ランタイムレッスン開始 12.4 第5回実行委員会 (4名参加) *明德小学童生活発表会で「ぞうれっしゃ」上演 ・12.9 特別レッスンの確認 ・12.26 合同レッスンと小出隆司氏講演準備 ・役者の確保 12.26 学童保育の子どものための合同レッスン (180名参加) 小出隆司氏講演「北王團長のぞうを守った話」(約80名参加)
1991年			
1.6	新春特別レッスン (111名参加) 大人男13、女35、子ども63名 レッスン会場は市職員会館8Fに移り1ヵ所となる		
1.8	事務局会議		
1.14	第6回実行委員会 ・チケット組織 大人123、子ども74、計197枚 ・一斉全市ピラ ・合唱団員名簿づくり ・プログラム作成 学童の子どものための状況も名簿で確認 ・招待 ・当日の要員、役割、日程等		
1.10	「おおきなおきなぞうを10とうつくろう」 絵画共同製作 (約30名参加)		
1.20	舞台の流れについてスタッフ打ち合せ		
1.26	学童保育所の合同レッスン		
1.27	寝屋川学童保育研究会出演 (約100名) 合唱 (1、2、7、11章)	プログラム作成・印刷	
1.28	第7回実行委員会 この時点でチケット1,000枚 前日、当日の細部確認		
2.2	舞台仕込み役者舞台練習 ゲネプロ 400名以上		
2.3	午前中 リハーサル 14時開演 4時30分終了 舞台でまとめ 子どもたちにジュース 5:30 スタッフまとめ 6:00 打ち上げ 合唱団 大人100名 (男20、女80) 子ども341名 参加者 (出演者も含めて) 約1,400名		

る』(折出健二他編著)、労働旬報社、1994年、p. 83~p.85

5) 井上英夫「地域を子ども・青年の活舞台に」『子どもの文化権と文化的参加』佐藤一子・増山均編、第一書林、1995年参照。

〔参考文献・資料〕

- ・重森暁編『共同と人間発達の地域づくり』自治体研究社、1985年
- ・清水則雄・藤村記一郎、小出隆司著『ぞうれっしゃよ走れ』労働旬報社、1989年参照。また、中日

新聞の連載「東山動物園50周年、人と動物の軌跡 31~49」及び「同、動・植物の共存時代100~112」1987年2月15日から7月11日を参照した。第七回子育て・文化協同全国交流研究集会埼玉集会実行委員会編『子育て・文化協同と地域づくり』、1992年

- ・佐藤一子編『文化協同のネットワーク』青木書店、1992年

(1995年10月20日受理)

Cultural Co-operatives of Community
and Nursery for Children

— A Hearing Document of "Zouressya ga yattekita" Concert —